

〔大 豆〕

1. 作付の概況

本年度の作付面積は全国で 138,300ha で前年より 3,800ha 減少し、九州でも 200ha 減少し 22,300ha であった。これは品目横断的経営安定対策の影響もあると推測される。県別では佐賀県で作付面積が 480ha 増加したが、他の各県は減少した。本年度は大きな気象災害がなく、収量は九州で前年対比 170 となり、大分県を除き平年より多収となった。

2. 作況の概況

7月中旬まで降雨が多く播種時期が遅れた地域が多かった。九州北部の梅雨明けは7月23日頃で梅雨明け後は高温乾燥傾向で推移し、一部で乾燥による出芽障害もあった。台風などの気象災害は少なく、気温は平年より1～5℃前後高く推移した。そのため、播種時期の遅れにもかかわらず生育が良好であった一方、青立ちの発生圃場もあった。収量および等級は平年並の地域が多かったが、登熟期の高温乾燥で粒の肥大が抑制された地域もあった。

県別では、福岡県は降雨で播種適期より10日程度遅まきとなり、一部で乾燥による出芽障害もあった。8月から10月は平年より2～3℃高く、9月下旬から11月上旬は過乾燥傾向で、一部で子実肥大が停止し青立ちが発生した。台風被害はなかったが、ハスモンヨトウとカメムシ類の発生が多かった。佐賀県は播種時期が例年より1週間程度遅れたが苗立ちおよび初期生育は良好であった。気温は生育期間を通じて平年より1～5℃前後高く推移し、登熟期の高温乾燥で粒の肥大はやや抑制された。また、ハスモンヨトウが多発し、一部で虫害以外の要因と思われる青立ちも発生した。熊本県は気温が平年よりも高く推移し、特に9月下旬から10月上旬は平年より5℃前後高かった。日照時間も比較的多く、台風災害などの顕著な気象災害はなかった。莢数は多く、粒大も十分で収量は平年並であった。大分県は播種が7月中下旬となり、一部で台風5号(8月2日)の降雨による出芽障害が認められた。また、カメムシ類や過乾燥によると思われる青立ちが目立つ地域もあり減収の大きな要因となり、作況指数も低かった。長崎県は生育期間中の気温が高く推移し、特に9月中旬から10月上旬まで高かった。降水量は平年より少なく、梅雨明け後の日照時間は多かった。また、登熟期の小雨で子実の肥大が抑制された地域もあった。宮崎県は8月中下旬まで気温は平年並であったが、開花期後成熟期まで記録的な高温と小雨で乾燥害による登熟不良もあったが、作柄は平年並以上であった。鹿児島県は7月中旬まで梅雨が長引き播種時期が遅れた。生育期間を通し気温が高めに推移し、特に9月下旬から10月上旬は平年より3℃以上高かった。日照時間は梅雨明け以降は平年より多く、降水量は7月下旬以降は平年より少なかった。台風被害はなかったが、ハスモンヨトウやカメムシ類が多発した。

2007年産大豆作付面積と収穫量

県別	作付 面積	10a 当たり 収量	収穫量	作況 指数	前年との比較							
					作付面積		10a当たり収量		収穫量			
					対差	対比	対差	対比	対差	対比		
	ha	kg	t		ha	%	kg	%	t	%		
全 国	138,300	166	229,400	103	△	3,800	97		5	103	200	100
九 州 計	22,300	189	42,200	109	△	200	99		78	170	17,200	169
福 岡	7,980	184	14,700	103	△	130	98		71	163	5,520	160
佐 賀	7,970	228	18,200	120		480	106		111	195	9,470	208
長 崎	473	188	889	138	△	73	87		106	229	441	198
熊 本	2,970	184	5,470	108	△	110	96		57	145	1,560	140
大 分	2,160	83	1,790	67	△	260	89		13	119	100	106
宮 崎	389	145	564	104	△	68	85		24	120	11	102
鹿 児 島	363	164	595	113	△	23	94		44	137	132	129

注) 農林水産省、2008. 2. 29公表データを引用